

成人看護学実習

目 的

成人期にある対象を総合的に理解し、対象のもつ健康レベルに応じた看護の特性について理解を深め、個別的な看護を実践できる能力を養う。

目 標

1. 成人各期における対象の特徴を理解し、発達段階に応じた援助ができる。
2. 疾病や健康障害の特徴を知り、日常生活に与える影響を理解するとともに、経過に応じた援助ができる。
3. 主要疾患と治療・検査を関連付けて理解し、看護に必要な援助技術が実践できる。
4. 対象との関わりを通して共感的態度を身につけ、自立・自律を尊重した行動がとれる。
5. 保健医療、地域社会との関連において、継続看護の重要性を理解する。
6. 保健医療福祉チームの一員として、自覚と責任のある行動がとれる。

成人看護学実習 I

(回復期・慢性期)

目的

回復期および慢性期（身体機能および生活行動に障害のある人・生涯にわたり疾病をコントロールする人）にある対象に対して看護の実際を学ぶ。

目標

1. 回復期・慢性期にある対象を身体的・精神的・社会的側面から総合的に理解できる。
2. 治療・症状に応じた援助ができる。
3. 健康障害に伴う生活への影響を理解し、機能低下や変化に応じた援助ができる。
4. 家族の存在と特徴について理解できる。
5. 対象および家族に、疾病および症状をコントロールしながら生活するための援助ができる。
6. 対象を尊重する態度を身につけ、援助関係を築くことができる。
7. 対象を支えるための保健医療福祉チームの連携・調整の実際を学ぶ。

内容

経過	内容		対象選定の目安	
	対象	看護のポイント	症状	疾患
回復期・慢性期	のある人 の身体機能および生活行動に障害	<ol style="list-style-type: none"> 1. 苦痛の緩和 2. 障害の拡大防止 3. 合併症の予防 4. 身体機能の障害に伴う、諸機能・生理的ニードの変化に応じた援助 5. 日常生活行動自立への援助 6. 障害受容過程への援助 7. 社会資源の活用 	疼痛 呼吸困難 胸水、浮腫 胸痛、不整脈 咳嗽、喀痰 高血圧 食欲不振、腹部膨満 腹痛、吐血、下血 黄疸、貧血、倦怠感 易感染、出血傾向 内分泌・代謝機能障害 掻痒感	虚血性心疾患 慢性心不全 慢性閉塞性肺疾患 気管支喘息、肺炎 胃・十二指腸潰瘍 肝硬変、クローン病 潰瘍性大腸炎、糖尿病 慢性膵炎、慢性肝炎 腫瘍（肺、消化器系、乳腺、上顎、喉頭、甲状腺、腎・泌尿器系、皮膚）
	生涯にわたり疾病をコントロールする人	<ol style="list-style-type: none"> 1. 疾病受容過程への援助 2. 寛解・維持、合併症の予防 3. 社会資源の活用 4. 生活習慣を適切に修正・変更するための援助 	排尿障害、尿毒症 水・電解質異常 高次脳機能障害 運動麻痺、運動失調 筋力低下、神経麻痺 循環障害、関節拘縮 皮膚潰瘍 ……など	悪性リンパ腫、白血病、骨異形成症候群 脳血管性疾患、脳腫瘍 骨折、頸椎・腰椎疾患、肩腱板損傷・断裂、股・膝関節疾患 脊髄損傷、四肢切断、慢性関節リウマチ 神経難病 褥瘡、熱傷 ……など

方 法

<学内実習>

ねらい：受け持ち患者の状態に応じた看護技術を習得するとともに、患者の理解を深め、臨地実習に備える。

1. 病棟実習開始前に、実習グループごとに行う。
 - 1) 受け持ち患者の看護を实践するうえで必要な技術を選択し、患者の状態を考慮した演習計画を立案し実施・評価する。

<病棟実習>

1. 病棟オリエンテーションを受ける。
2. 看護のポイント及び対象選定の目安に、該当している1名の対象を受け持ち患者とする。
3. 立案した看護計画に基づいて看護を实践する。
4. 1場面について、プロセスレコードを記載する。
5. テーマカンファレンスを開催する。
6. 実習終了後は、看護のポイントを踏まえ、「学んだことと今後の課題」について共通レポート用紙に記載する。

成人看護学実習Ⅱ

(周手術期)

目的

周手術期にある対象に対して看護の実際を学ぶ。

目標

1. 周手術期にある対象を身体的・精神的・社会的側面から総合的に理解できる。
2. 対象の病態および手術療法と術式について理解できる。
3. 手術前検査、処置の必要性を理解し、必要な援助ができる。
4. 麻酔および手術における身体侵襲について理解できる。
5. 手術後の身体的苦痛緩和に向けた援助と、術後合併症を予測した観察および予防のための援助ができる。
6. 対象および家族の心理的状态が理解でき、状態に応じた援助ができる。
7. 手術による身体機能の変化を理解し、手術後の生活に適応できるような援助ができる。

内容

経過	内容		対象選定の目安
急性期	対象	看護のポイント	疾患
	周手術期にある人 全身麻酔	<p><手術前の看護></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 健康障害によって生じた器質的、機能的変化に応じた援助 2. 心理・社会的側面のアセスメントと、不安を最小限にし適応を促すための援助 3. 術前検査・処置・治療が安全・安楽に行われるための援助 4. 手術を受けることにより予測される身体侵襲・機能の変化、合併症のアセスメントと状態に応じた看護 5. 主体的療養行動促進に向けた援助 6. 家族の身体・心理・社会的側面およびニーズの理解と状況に応じた家族への支援 7. 手術が安全に行われるための術前の看護（消化管の準備、身体の清潔、血管確保と輸液、更衣、バイタルサインの測定、手術室への移送など） <p><手術中の看護></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 手術室看護師の役割（器械出し看護師・外回り看護師） 2. 麻酔導入から覚醒までの看護 <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象の心理的影響因子および、それに伴う反応の理解と援助 2) 麻酔の種類と作用機序および使用される薬剤、筋弛緩薬等の薬理作用の理解 3) モニター類の装着と全身状態の観察 4) 術式に応じた体位の固定とその影響 5) 合併症の予防に向けた援助（褥瘡、神経障害、熱傷、深部静脈血栓など） 6) 麻酔覚醒経過に応じた観察と看護 	食道・胃・大腸疾患（胃がん、結腸がん、直腸がん） 肝・胆・膵疾患（肝臓がん、胆嚢がん、膵臓がん、胆石・胆嚢炎） 肺疾患（肺がん） 筋・骨格器系疾患（腱板損傷・断裂、腰椎椎間板ヘルニア、腰椎変性すべり症、頸椎症性脊髄症、変形性膝関節症、変形性股関節症、大腿骨頸部骨折） 乳腺腫瘍

経過	内容		対象選定の目安
	対象	看護のポイント	疾患
		7) 危険な状態を予知し事故防止に向けた援助 3. 手術室環境の理解 清潔区域、室温と湿度、空調・空気調節、照明、感染防止、手術器機の洗浄・滅菌・消毒 4. 手術に携わるチームメンバー（術者、麻酔医、メディカルスタッフ）との協力 <手術後の看護> 1. 手術侵襲による身体的変化を把握し、生命を維持するための援助 2. 手術後に起こりうる心身の苦痛緩和への援助（疼痛、嘔気・嘔吐、口渇、倦怠感、せん妄など） 3. 手術により制限される日常生活への援助 4. 手術により変化した機能を理解し、患者が日常生活に適応できるための援助 5. 家族の身体・心理・社会的側面およびニーズの理解と状況に応じた家族への支援	

方 法

<学内実習>

ねらい：周手術期特有の看護技術と知識を習得し、臨地実習に備える。

1. 病棟実習前に、実習グループごとに行う。タイムスケジュールをグループごとに作成する。個々に既定の用紙に行動計画を立案し、担当教員に提出する。
2. 当日までに、『周手術期看護に関する DVD』を視聴したうえで、事例に関して以下の内容で演習計画を立案し、計画に基づく実施と評価を行う。
 - 1) 手術後の帰室時シミュレーション：ストレッチャー移送、中央配管設備の使用、帰室時バイタルサインの測定と必要な観察
 - 2) 手術後患者の初回離床への援助（臥床⇒端座位⇒立位）～外科病棟実習対象者
 - 3) 車椅子⇄ベッドへの移動介助～整形外科病棟実習対象者
3. 見学患者の情報収集と事例に関する学習・技術練習

<手術棟>

1. 見学を基本とする。
2. 実習期間は、成人看護学実習Ⅱ実習1週目の初日1日とする。
3. オリエンテーションを受け、指導者の指示に従い行動する。実施後は行動計画表に行動実績を記載する。

<病棟>

1. 手術棟実習終了後に病棟実習を開始とする。
2. オリエンテーションをうける。
3. 1週目は、見学または指導者と共に援助を実施しながら、手術を受ける患者の経過（術前・術後）および看護について学ぶ。
4. 患者を受け持ち看護過程を展開するのは、2週目に手術が予定されている対象とする。
5. 看護計画は術後1日目に提出し、以降は立案した看護計画に基づき看護を展開する。
6. 実習時間は最大17時まで延長可能とする。
7. 実習終了後は、「周手術期看護の実際（各期）から学んだことと課題」について、共通レポート用紙に記載する。

成人看護学実習Ⅲ

(終末期)

目的

終末期にある対象に対して看護の実際を学ぶ。

目標

1. 終末期にある対象を身体的・精神的・社会的・スピリチュアルの側面から総合的に理解できる。
2. 対象に生じる身体的苦痛を、病態、加齢に伴う生体機能の変化、検査・治療と関連付けながら理解し、苦痛緩和に向けた援助ができる。
3. 対象のQOLについて考え、その人らしく生活するための援助ができる。
4. 家族（対象を支える人々）の身体的・精神的・社会的状況を理解し、状況に応じた援助ができる。
5. 保健医療福祉チームおよび対象を取り巻く人々との連携・調整の実際を理解できる。
6. 人間の尊厳を重んじる態度を身につけ、自己の死生観を深めることができる。

内容

経過	内容		対象選定の目安	
	対象	看護のポイント	症状	疾患
終末期	あらゆる治療をしても治癒の見込みがなく、生命の終焉に向かいつつある人	<ol style="list-style-type: none">1. 生体機能の変化と全身状態の観察2. 全人的苦痛（身体的・精神的・社会的・スピリチュアル）の理解3. その人らしく生を全うできるようなQOLに向けた援助<ol style="list-style-type: none">1) 身体的苦痛の緩和<ol style="list-style-type: none">(1) 痛みのコントロールとケア(2) 痛み以外の症状のコントロールとケア2) 精神的苦痛の緩和<ol style="list-style-type: none">(1) 告知の有無と心理的影響の理解(2) 心理過程（死の受容過程）の理解と心理状態に応じた援助3) 意志や自立を尊重し、安全・安楽を考慮した生活への援助<ol style="list-style-type: none">(1) 日常生活行動の援助(2) 生活環境の調整4) 倫理的配慮と尊厳を守るための援助<ol style="list-style-type: none">(1) 病名告知とインフォームド・コンセントにおける医療チーム内の調整と心理的サポート(2) 自律した判断と主体的な行動の支持5) 保健医療福祉チームによる包括的アプローチ	癌性疼痛 全身倦怠感 発熱 呼吸困難 咳嗽、胸水 死前喘鳴 食欲不振 嚥下困難 悪心・嘔吐 腸閉塞 黄疸、便秘 下痢、腹水 浮腫 易感染、出血傾向 排尿困難 睡眠障害 頭蓋内圧亢進症状 不安 せん妄 抑うつ ……など	悪性新生物（肺、食道、胃、結腸、直腸、膵臓、胆嚢、肝臓） 肝硬変 肺炎、心不全 白血病 多発性骨髄腫 悪性リンパ腫 各臓器への転移 ……など

経過	内容		対象選定の目安	
	対象	看護のポイント	症状	疾患
		4. 家族（対象を支える人）へのサポート 1) 家族の予期的悲嘆の理解と援助 2) 家族の希望を考慮し、対象の看護に参加できるための援助 5. 危篤時の看護と家族への対応 6. 臨終時の場面における家族への配慮 7. 死後の看護（死後の処置、解剖時の対応など）		

方 法

<学内実習>

ねらい：終末期患者の状態に応じた看護技術と知識を習得するとともに、患者の理解を深め、臨地実習に備える。

1. 病棟実習開始前に、実習グループごとに行う。タイムスケジュールをグループごとに作成する。個々に既定の用紙に行動計画を立案し、担当教員に提出する。
2. 内容
 - 1) 受け持ち患者の情報収集
 - 2) 以下の内容について演習計画を立案し、実施・評価する。
 - (1) 持続点滴中で自力での体位変換が出来ない患者に対し、病衣・紙オムツ・シーツ交換を実施する。
 - (2) 受け持ち患者の看護を实践するうえで必要な技術を選択し、患者の状態を考慮した看護技術を実施する。
 - 3) 『死後の処置』DVD 視聴
 - 4) 事例に関する学習

<病棟実習>

1. 病棟オリエンテーションを受ける。
2. 対象および対象選定の目安に該当している1名の対象を受け持ち患者とする。
3. 立案した看護計画に基づいて看護を实践する。
4. 受け持ち患者の危篤・死亡時は、19時まで実習時間延長を可能とする。
5. 実習終了後は、生命の尊厳・死生観について自己の考えを共通レポート用紙に記載する。テーマは自由。